

終章 持続可能な集合的ウェルビーイング

プラネタリー・バウンダリーの先にある、Beyond SDGs 時代の「北極星」

巻頭で直視した「プラネタリー・バウンダリー」が、人類が超えてはならない「生存の床」であるならば、私たちが向かうべき方向を照らす「北極星（Polaris）」は何か。SDGs の数値目標に追われ心が疲弊した現代社会において、個人と社会、そして地球システムが共に繁栄（Flourishing）するための到達点——「持続可能な集合的ウェルビーイング」の真価を解き明します。

第1節：なぜ、いまウェルビーイングなのか

SDGs 不達成の裏にある「個人の総合目標」の欠落

2030 年に向けた「持続可能な開発目標（SDGs）」は、世界中に環境と開発の意識を広げる上で大きな功績を残しました。しかし、今、私たちは冷静に冷徹な事実を直視しなければならない。期限まで数年を残す現在、国連の報告書が示す通り、主要な SDGs ターゲットの多くが「達成不可能」あるいは「後退」という危機的状況に瀕しています。

なぜ、これほどまでに世界中で SDGs のバッジが胸に飾られ、企業や学校でスローガンが叫ばれたにもかかわらず、地球の崩壊を止める変革を起こせなかったのでしょうか。

その最大の理由は、SDGs が掲げる「17 の目標」という外側の構造・数値管理（Outer Framework）ばかりが先行し、それを動かすエンジンである「人間の内面的成長（Inner Dimension）」と「個人的な総合目標（内なる幸福・ウェルビーイング）」がすっぽりと抜け落ちていたからではないでしょうか。

人間は、外部から与えられたノルマや数値目標、あるいは「我慢しなければ地球が壊れる」という義務感と恐怖だけでは、長期的かつ主体的に動き続けることはできません。外的な目標（SDGs）と、自らの内なる豊かさ（ウェルビーイング）が解離したとき、人々は無力感と精神的燃え尽き（バーンアウト）に陥ります。

外側の制度変革と、内側の精神的成熟——この二つが美しく統合されて初めて、持続可能な社会への真のドライブ（推進力）が生まれるのです。

第2節：個人的ウェルビーイングの基盤

では、私たちが目指すべき「ウェルビーイング（幸福・健やかさ）」とは何でしょうか。ポジティブ心理学の創始者マーティン・セリグマンらは、個人の主観的ウェルビーイングを構成する要素として「PERMA（パーマ）モデル」を提唱しました。

P (Positive Emotion) : 喜び、感謝、安らぎといったポジティブな感情

E (Engagement) : 自らの強みを活かし、時間に没入する体験（フロー）

R (Relationships) : 他者との深くて温かい人間関係・信頼

M (Meaning) : 自分を越えた大きな存在や目的への貢献・生きがい

A (Accomplishment) : 目的の達成や成長を通じた自己効力感

PERMA モデルの光と限界

この PERMA モデルは、私たちが日々の暮らしの中で自らの心を調律し、個人的な幸福感を高める上で極めて有効なコンパスです。

しかし、ここにも一つの重大な罫（限界）が存在します。それは、「**他者や地球の破壊の上に成り立つ、自己完結した個人の PERMA**」が存在し得てしまうことです。

自分個人がポジティブな感情（P）に満たされ、ビジネスに没入（E）し、達成感（A）を得ていたとしても、その消費活動が途上国の子どもたちの労働を搾取し、大量のCO₂を出して地球を汚染しているのだとすれば、それは「持続可能」な幸福とは呼べません。個人のウェルビーイングだけに閉じたアプローチは、ときに社会の不公正や地球の限界から目を背ける「麻醉」として機能してしまうリスクを孕んでいます。

第3節：持続可能な集合的ウェルビーイング

あらたに。注目に値するものは、持続可能な集合的ウェルビーイングです。

集合的ウェルビーイングとは、「私」の幸福が「あなた」の幸福、そして「地球の健やかさ」と不可分に結びついているという世界観です。

エール大学らのフレームワークでは、この持続可能な集合的ウェルビーイングを以下の「5つのレイヤー（層）」の多体調和として捉えています。

エール大学が提唱する集合的ウェルビーイング5つの統合要素

1. 個人的ウェルビーイング (Personal Well-being) :

心身の健康、感情の調律、
PERMAに基づく主観的な幸福感と自己受容。

2. 関係的・地域的ウェルビーイング (Relational & Community Well-being) :

孤独の解消、コミュニティでの信頼（ソーシャルキャピタル）、
互助、向社会的行動、世代を超えた共生。

3. 社会・構造的ウェルビーイング (Societal & Structural Equity) :

気候正義の実現、環境不公正の解消、多様性と人権の尊重、
公平な経済・社会システムの構築。

4. 生態系・地球的ウェルビーイング (Ecological & Planetary Well-being) :

プラネタリー・バウンダリーの安全な枠内での存続、
自然との繋がり (バイオフィリア)、ネイチャーポジティブの達成。

5. 世代間・時間的ウェルビーイング (Intergenerational Sustainability) :

「あとに続く子どもたち」への責任、
過去から未来への希望のバトンタッチ。

この5つの要素は、どれか一つを犠牲にして他を立てる関係（トレードオフ）ではありません。

個人の心が整うことが関係性を豊かにし、地域の絆が社会構造を変え、それが地球生態系を再生させ、未来世代の笑顔へと還流するという考えです。

この「人間と地球の全的繁栄 (Human and Planetary Flourishing)」こそが、持続可能な集合的ウェルビーイングの真髄である。

第4節：Beyond SDGs 時代が目指すもの

北極星と真のソーシャルキャピタル

2030年のその先——「Beyond SDGs」の時代において、人類が掲げるべき唯一無二の羅針盤、それこそが

持続可能な集合的ウェルビーイング

(SCW：Sustainable Collective Wellbeing)

本書の巻頭で提示した「プラネタリー・バウンダリー（7つの境界突破）」が、人類が二度と踏み越えてはならない「物理的な限界（床と壁）」を示すものであったとすれば、この持続可能な集合的ウェルビーイング SCW は、私たちが自らの意思で目指すべき「精神と文明の極致（北極星）」といえます。

著者が主催する

一般社団法人 SDGs 活動支援センターは、Beyond SDGs として、この

持続可能な集合的ウェルビーイング

(SCW：Sustainable Collective Wellbeing)

を強く提言していきます。

そして、この北極星に向かって宇宙船地球号を操舵していくための「見えない接着剤」となるのが、本書全体を通じて学んだ「真のソーシャルキャピタル（社会関係資本）」に他なりません。

金銭や物理的インフラを超えた、人と人の間の「信頼」「お互い様の規範」「顔の見えるネットワーク」、そして人間と自然の間の「愛と共感の絆」。このソーシャルキャピタルが豊かに蓄積された地域社会こそが、気候災害や分断の危機を乗り越え、集合的ウェルビーイングを永続的に生み出す「永久機関」となります。